

# 三人組

森川 成美 (児童文学者)

「あのね、ごめん英麻、もういっしょに帰れないから。」

四年生の九月、学校が始まってすぐ、ももねに言われた。

「どうして？」

びっくりだ。

ももねとカナ、そして私は、みんなも認める、仲良し三人組だったはずだ。

私が三年生で引越してきてから、同じ方向に帰る私たちは、いつもいっしょだった。

ももねとカナは、保育園の頃からの友達だったが、転校生の私を快く受け入れてくれた。私はそれをとっても感謝していた。「あなたの親友は誰？」と聞かれたら絶対、ももねとカナと答える。そう思っていた。

それが、なぜ？

「カナと私、あんまり仲良すぎて、それってよくないって話し合ったの。」

「え？ どういうこと？」

「つまり、二人で仲良くしすぎるのは、やめようって。」

「は？ なぜ？」

「だからあ。」

ももねは、めんどくさそうに、肩をすくめた。

「私たち、そう決めたの。じゃね。」

私たち？ それには、私は入っていないってこと？

カナのほうはどう思っているのだろうか？

「ねえ、ももねとけんかした？」

カナは口をへの字に曲げた。

「けんかじゃない。これからも仲良しでいよう、って言った。」

「じゃあ、今までのままってこと？」

..... 20 ..... 15 ..... 10 ..... 5 .....

私の声は弾む。

「違う。仲良くしすぎるのは、やめたの。」

「どういう意味？」

「だからあ。」

カナはももねと同じような声を出した。

「二人、あんまり仲良くすぎるのは、よくないって思っただけ。そう話し合ったの。」

カナはももねと、そっくり同じことを言う。

「いつ？」

「夏休み。」

夏休み、私はずっとおばあちゃんの家に行った。だから二人と遊んでいない。

その間、何かあったの？

心の底が、うずうずする。痛がゆいような。かきむしらないでは、いられないよ  
うな。

「そんなのおかしいよ。だって仲良かったじゃない？ もったいないよ。」

ふん、とカナは鼻を鳴らした。

「私たちが決めたんだから。私たちのことだから。英麻には関係ないよ。」

「けんかしてないのに、おかしいよ。」

「けんかしてなきや、仲良くしなきやいけないわけ？」

どうして分からないの、とカナは言いたそうだ。

「じゃあ、せめて理由を教えてください。」

「どうして、英麻に教えなきやならないの？ 私たちのことだから、私たちが知っ

てればいいでしょ。」

それから、二人がいつしよにいるところを見ることは、もうなかった。

二人で決めたことなら、私がどう思おうといいのか。

結局、最後は二人なんだ。私なんて、ただくっついてたおまけだったんだ。

私のことなんて、どっちも考えてない。ひどい。

カナが私の百メートル前を歩いていく。

その百メートル前をももねが歩いている。

私が嫌われたんじゃない。だったら、どっちかに追いついて、並んで帰ってもい

25

20

15

10

5

いはず。

ちよつと足を速めてみてから、やっぱりやめた。

それは違う。

私は三人でいたかったんだ。

でも、二人の心を、私を変えることはできない。理由が分かったとしても、結果は同じだ。

もう終わったんだ。

三人、きやつきやと騒ぎながら帰っていった、あの時間は。

本当は寄り道をしてはいけないのに、三方向に分かれた道の角にある、お地蔵さんの敷地の低いブロック塀に腰かけて、足をぶらぶらさせながら、長いこと話した、あの時は。

何を言ったのかさえ覚えていないぐらい、ささいな話ばかりだった。

お地蔵さんの所に来た。

まずももねが右に曲がり、そしてカナがまっすぐ進んだ。

私はちよつと立ち止まり、それから左に曲がった。

たぶん、私たちは大きくなったんだ。

バイバイ、昔の私。

私は振り返り、お地蔵さんに向かって、手を振った。



森川 成美（もりかわしげみ）

一九五七年生まれ。大阪出身。『マレスケの虹』で、第四十三回日本児童文芸家協会賞を受賞。ほかの著書に「アサギをよぶ声」シリーズ（偕成社）、『たとえリセットされても』（文研出版 二〇二四年）など多数。